私の祖母はリュウマチを患っています。リュウマチとは、関節がうまく動かなかったり、骨が曲がってしまったりする病気です。

高岡市立戸出中学校　三年

【中学生の部】〇最優秀賞

「障害は神様からのギフト」

　祖母は、昔は床屋を経営していましたが、リュウマチにかかってはさみを持つことができなくなり、理容師を続けることができなくなりました。

　リュウマチの症状が進んでいって箸が持てなくなったため、食事のときはフォークやスプーンを使うようになりました。また、じゃんけんをするときも、グーやチョキを出すのは難しくてパーしか出せません。これは手をきちんと握ることができなかったり指先の細かい動きができないということにつながります。そのため、重い物を運ぶときや細かい作業をするときは私や弟が手伝うことが多いです。

　私は小学校に入るまで、祖母が障害者だということを理解していませんでした。私が物心ついたときにはすでに祖母はリュウマチにかかっていたので、私は手足の動きが不自由なのはお年寄りなら当たり前だと思っていたのです。だから、母から祖母の障害について初めて聞いたときは少し驚きましたが、祖母の優しさを知っている私は、祖母は普通のお年寄り「特別」なのだと思いました。

　小学校五年生の時、私は友達と一緒に祖母の家に遊びに行きました。祖母の手足を見た友達は、

「おばあちゃん障害者なんだ。かわいそう。」と私に言いました。その時、私は友達が祖母に対して言った「かわいそう」という言葉が理解できず戸惑いました。それと同時になぜかむかついてしまいました。

　私は、祖母のことを「かわいそう」だと思ったことが一度もありません。だから、友達の言葉から伝わった、「障害者＝かわいそう」という考えがショックでした。この時私は友達に対して、

「そうだね。」

と苦笑いすることしかできませんでした。

　友達が帰った後、私は祖母に、

「おばあちゃんは自分が障害者だからかわいそうだと思ったことがある？」

と聞きました。質問した直後に、なんて失礼なことを聞いたのだろうと思っていると、祖母は笑顔で、

「自分や障害者のことをかわいそうと思ったことはないよ。だって、障害は神様からのギフトだからねえ。」

と言いました。この言葉を聞いたとき、私は泣きそうになりました。祖母を支えてくださる周りの方々と祖母との、お互いを思う優しさを感じたからです。

　障害がある祖母は周りの人に支えてもらうことが多いのでしょう。そして、そのことを祖母はきっと心から感謝しているのでしょう。周りの人の温かい気持ちや優しさにたくさん触れられる自分の幸せを感じ、その幸せは障害のおかげ。祖母はそんなふうに受け止めているのかもしれません。障害を前向きに受け入れて明るく生きている祖母のことがもっと大好きになりました。

　しかし、障害を受け入れられなかったり、障害があるというだけで差別をされ、辛い思いや悲しい思いをしたことがあるという方もいらっしゃると思います。そんな方々も、笑顔で明るく笑顔で暮らせるような温かい世の中になってほしいです。そのために、「障害は神様からのギフト」という考え方が世界中に広がるように願います。そんな世の中に近づくために、自分にできる小さなことをしていきたいと思います。